様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２３２００７６

研究課題名（和文）中世モンゴル語研究の統合

研究課題名（英文）Synthetic　studies of Middle Mongolian

研究代表者
栗林　均（KURIBAYASHI, Hitoshi）

東北大学・東北アジア研究センター・教授

研究者番号：３０１５３３８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　14,700,000円、（間接経費）　4,410,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ウイグル式モンゴル文字、漢字、パスパ文字、アラビア文字で表記されている、13～14世紀に記録された中世モンゴル語を文献学的・言語学的な観点から研究した。研究では、中国、モンゴル国、英国、フランス、イタリア、トルコ等で中世モンゴル語の文献調査を行い、資料を調査・整理してその成果を図書で公刊した。また、漢字、アラビア文字、パスパ字、モンゴル文字で表記された個別の資料の文献学的研究を研究発表で公開し、論文として公刊した。集積した、テキストおよび画像をの電子化データとして統合して、汎用的なデータベースを構築した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we have pursued philological and linguistic studies of Middle Mongolian, which contains numerous materials of Mongolian language recorded by means of such scripts as Uighur, Hanzi(Chinese characters), Pagspa, Arabic in the 13th and 14th centuries. We have verified original copies of Middle Mongolian materials kept in libraries and archives of Asia and Europe, and prepared to publish their facsimile. We have organized text data and image data of such materials in various scripts of Middle Mongolian and made a database system for wide use.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：モンゴル語　文献学　言語学　モンゴル文字　パスパ文字　アラビア文字

１．研究開始当初の背景

モンゴル文献学は、19 世紀以来、フランス、ドイツ、ロシア、日本をはじめとする世界の東洋学の中で輝かしい伝統を有する研究分野である。中でもモンゴル帝国とその遺産を継承する時代に属する「中世モンゴル語」の研究は、資料の時代の古さと種類の多さ、および内容の豊富さから、研究の質・量ともに抜きん出た位置を占めており、出版された論文、研究書、資料はおびただしい数にのぼる。日本においても、那珂通世博士、白鳥庫吉博士、服部四郎博士、小澤重男博士をはじめとする卓越した研究者によって、世界をリードする多くの研究が行われてきた。

こうしたモンゴルの「外から」の研究に対して、モンゴルの「中から」の研究は、1990 年代から、大きな高まりを見せている。モンゴル国、および中国の内モンゴルにおいてモンゴル民族の伝統的な言語文化と文化財保護への関心が高まったことと関連して、モンゴル語文献資料の研究および原典の複製の出版が相次いで行われている。こうした中で、新たに発見され、公開された資料も多数にのぼる。同時に、新たに存在が報告されたが、未だに公開・公刊されていない資料も少なくない。このように、モンゴルの外における 19 世紀以来の伝統的な研究の蓄積と、モンゴルの中における 1990 年代以降の研究の興隆は、モンゴル文献学の二つの大きな動向として捉えることができる。

日本におけるモンゴル文献学、および中世モンゴル語研究は、世界的に極めて高いレベルにあると言うことができる。それは、日本の研究者が欧米をはじめとする世界の伝統的な研究に精通して、それらに基づいた研究を行っていることとも関連している。これは、モンゴルの中における最近の研究に対しても同様であり、世界中の研究成果を積極的に取り入れて、その上に成果を積み重ねていることは、日本におけるモンゴル研究の大きな特徴となっている。

本研究の代表者である栗林と分担者である斎藤、松川らは、こうした日本のモンゴル研究の伝統の中で、1980 年代から中世モンゴル語の研究に従事してきた。栗林は『元朝秘史』『華夷訳語』等の漢字表記モンゴル語資料および古訳本『孝経』をはじめとするウイグル式モンゴル文字資料の研究を、斎藤は『ムカディマット・アル・アダブ』『ライデン語彙』等のアラビア文字資料の研究を、そして松川は「少林寺聖旨碑」「モンゴル字碑文」といったウイグル式モンゴル文字およびパスパ文字資料の研究を行ってきた。研究成果の一部は、研究論文、資料集、著書として公刊した。それと同時に、研究の過程で入力し、利用してきた文献資料の電子化データが大量に蓄積されている。

こうした研究は、それぞれの文字表記の側面からみた「中世モンゴル語」の特徴を扱っている。それぞれの文字表記を介して行っている研究は、他の文字表記を介した研究を補足し、また他の研究によって補完されるべき性質のものである。研究代表者・研究分担者は、それぞれの文字資料の研究を行う中で、異なった文字資料の情報を統合させて、研究を行う必要性を痛感してきた。多種の文字資料を大量に含む「中世モンゴル語」を総合的に研究することは、複数の研究者の共同研究という形態が望ましい。栗林・斎藤・松川の研究は、モンゴル語文献資料の電子化利用という研究の手法と方向性において共通する部分が多い。こうして、それぞれが蓄積してきた大量のデータと研究を統合して、言語実体としての「中世モンゴル語」の言語的特徴を解明するための共同研究を企画するに至った。

２．研究の目的

本研究では、多種の文字資料に反映されている音韻・文法・語彙等の特徴を統合することにより、中世モンゴル語の言語的な特徴を総合的に解明する。

（１）「中世モンゴル語」の語彙の総体を明らかにする。

ウイグル式モンゴル文字、パスパ文字、アラビア文字、漢字で表記された中世モンゴル語文献資料について、文献資料の目録を整理し、個別の文献ごとに全単語の索引を作成し（または既存のものを点検し）、それらを集積することにより、中世モンゴル語の語彙の総体を明らかにする。同源の語彙をひとつのキーのもとに集めて、「中世モンゴル語辞典」の編纂を進める。

（２）「中世モンゴル語」の文法体系を明らかにする。

異なった文字で表記された文献資料の文法形式（主に接尾辞）には、多くの対応例に合致しているものと並んで、そうした対応からはずれるものや、一方に存在して他方には現われないものが少なくない。類似した形態で意味や用法の違いが見られる場合もある。各種の文字で表記された文法形式が、別の文字で表記された文法形式とどのように対応しているか、それらの対応関係と相違点を明らかにした上で、中世モンゴル語の文法体系を解明する。

（３）「中世モンゴル語」の音韻体系を明らかにする。

どのような文字にも表記上の制限がある。「中世モンゴル語」を表記している複数の文字資料のうち、ある文献で区別される音声の違いが、別の文献で区別されない場合があり、その逆の場合もありうる。こうした表記上の違いを互いに比較することによって、一種類の文字資料だけを扱っている場合には判定できない情報が他の文字資料によって得られることが少なくない。互いに補い合う性格のこれらの資料・情報を互いに比較することによって、文字表記の背後にある「中世モンゴル語」の音韻の体系を考察し、明らかにす

る。
「研究の統合」をかかげる本研究の学術的な特色・独創的な点は次の通りである。
（1）ウイグル式モンゴル文字、パスパ文字、アラビア文字、漢字で表記されたモンゴル語の文献資料のすべてを取り込んだ包括的な研究であること。
（2）これまでに蓄積された文献資料の電子化テキストを集成するとともに、それに文献資料の画像データを関連付けた大規模なデータベースの構築へと繋がる体系的な研究であること。これによって、紙媒体と電子化版での「中世モンゴル語辞典」の編纂に進むことが可能となる。
（3）世界の伝統的なモンゴル研究と、モンゴル内部における最近の研究の成果を取り入れると同時に、日本における研究成果を世界に発信してモンゴル文献研究のハブ拠点を形成するための研究であること。

３．研究の方法
上記の研究目的を達成するために、次のような方法で研究を進めた。
（1）電子化データの整理と統合：研究者が個別に入力作成してきた大量のウイグル式モンゴル文字、パスパ文字、漢字、アラビア文字表記の電子化データ（テキスト）を点検・整理し、それらを統合するために統一的なシステムを開発する。
（2）中世モンゴル語データの分析と検討：点検・整理されたデータに基づいて、それらを表記、音韻、形態、語彙、の各分野にわたって比較と評価を行う。個別の資料を検討することと、それらの資料を互いに比較する両面から研究を行う。
（3）中世モンゴル語の文献資料の整理：中世モンゴル語に属する様々な文字資料・文献が保管されている世界の図書館や古文書館で原本確認の調査を行い、それをもとに文献資料の良質な写真、複写、拓本を画像データとして蒐集し、整理する。これらのうち、これまでに公刊されたものより鮮明な画像、および未公刊の資料を資料集として公刊する準備を進める。
（4）上記文字データの文字データと画像データを相互に参照できるように、統合的なデータベース・システムを開発する。
（5）国際研究会議、シンポジウムを開催して、モンゴル文献学に関する研究者ネットワークと、世界の研究動向を集約する研究ハブの形成に向けて活動する。

４．研究成果
研究期間中に、研究者はこれまでに蓄積してきた中世モンゴル語の電子化テキスト－主として各種文字資料をローマ字転写したテキストデータ資料－を点検・整理する作業を行った。
同時にそれと並行して、それぞれの研究者が蓄積してきた中世モンゴル語の資料を集約して相互に参照・比較する研究を進め、それらの語彙項目をモンゴル文語の見出し語をキーワードとして検索できるシステムの開発を進めた。具体的には、『蒙漢詞典 増訂本』（内蒙古大学出版社、1998）の見出し語をキーワードとして利用するために、同辞書の見出し語と本文のすべて（見出し語のローマ字転写、モンゴル文字表記、発音記号表記、漢語語釈）を電子化して、基本的なデータベースとし、各種文字で表記された語彙資料をそれと関連付ける作業を行った。
国際的な研究のネットワーク形成のために、2010 年 11 月に京都で、2011 年 2 月に仙台で「モンゴル語文献学」をテーマに国際ワークショップ（研究集会）を開催した。ワークショップには日本、中国、モンゴル国の研究者が参加した。2011 年の国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」では、研究発表 11 件を含む予稿集を作成し、ホームページで公開した。ワークショップでは、松川（学会発表③）と栗林（学会発表④）が研究発表を行い、栗林はそれに基づいた研究を論文として公刊した（雑誌論文④）。
また、中世モンゴル語資料の電子化利用に関連して、特に伝統的なモンゴル文字の標準化（Unicode）に基づいたデータベースの構築、およびパソコン、インターネットでの利用を行うための研究とシステムの開発を進め、栗林はまとめた成果を学会において研究発表を行った（学会発表②）。
中世モンゴル語における各種文字の文献資料について、それぞれの研究者が行った主な研究成果としては、次のようなものを挙げることができる。
栗林は、主にウイグル式モンゴル文字資料と漢字表記のモンゴル語資料を研究した。ウイグル式モンゴル文字資料としては、モンゴル語古訳本『孝経』の影印・モンゴル語ローマ字転写・漢字翻刻、モンゴル語全単語索引、モンゴル語語尾索引を整理して著書として公刊した（図書②）。漢字表記資料としては、『元朝秘史』モンゴル語の意味を解明する基礎資料として、『元朝秘史』における傍訳漢語の索引を著書として公刊した（図書⑥）。さらに中世モンゴル語の語彙研究の一環として、モンゴル語古辞書の研究を進め、清朝時代に編纂された『蒙文総彙』および『蒙文倒綱』等の資料を整理して、著書として公刊した（図書①⑤⑧）。このほか、モンゴル系諸言語の比較研究の見地から中世モンゴル語の語彙の特徴を明らかにするためにダグル語、バオアン語、土族（モングォル）語等の言語に保持されているモンゴル系の語彙項目を整理して著書として公刊した（図書③④⑦）。研究期間中、栗林は中国に調査旅行を行い、資料を収集し、現地の研究者と学術交流を行い、研究者と研究機関のネットワークを形成した。訪問・交流した主な研究機関は、北京市の中央民族大学蒙古語言文学系、中国社会科学院民族学与人類学研究所、人民

大学、フフホト市の内蒙古大学蒙古学学院、内蒙古師範大学蒙古学学院、内蒙古社会科学院、蘭州市の西北民族大学蒙古語言文化学院、西寧市の青海民族大学、等である。

斎藤は、アラビア文字表記モンゴル語の資料に関して、英国、ドイツ、イタリア、フランス、トルコの図書館・古文書館を訪問してそれらに所蔵されるアラビア文字表記モンゴル語写本の所在と保存状態を調査した。それによって写本の画像を収集・整理し、文献学的な研究を進めた。アラビア文字表記モンゴル語の表記および発音に関して国際学会で研究発表を行い（学会発表⑤）、学術論文として公刊した（雑誌論文①②）。調査旅行で収集した写本の良質の画像を「アラビア文字表記モンゴル語」資料集として出版するための準備を進めた。

松川は、中国およびモンゴル国でウイグル式モンゴル文字、パスパ文字、および契丹文字で書かれた碑文の調査旅行を行い、モンゴル語碑文の解釈と言語的特徴についての研究を行った。契丹文字資料についての研究（雑誌論文⑥）、漢蒙対訳碑文のモンゴル語に対する訳注（雑誌論文⑤）を公刊したほか、新発現のパスパ文字碑文について国際学会で報告した（学会発表①）。特に新発現のパスパ文字碑文は、これまで学界に知られていなかった資料であり、この研究によって新たな中世モンゴル語資料が追加された意義はおおきい。

それぞれの資料を相互に参照するためのキーとして『蒙漢詞典』の電子化を完了して、「中世モンゴル語辞典」制作の基礎とした。電子化した『蒙漢詞典』は、パソコン・インターネットで検索して利用することができるように、インターネットで公開した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①Saitô Yoshio, The Mongolian Words in the Quadrilingual Vocabulary Preserved in the Topkapı Palace Museum Library, *Current Trends in Altaic Linguistics,* 査読無,2013年、305-338

②Saitô Yoshio, Terminative Case Suffix in Middle Mongol, *Unknown Treasures of the Altaic World in Libraries, Archives and Museums,* 査読無,2013年、371-375

③栗林均、「《御制満珠蒙古漢字三合切音清文鑑》中以漢字転写的蒙古語特征」、《首届中国少数民族古籍文献国際学術研討会論文集》、査読無、2012年、258-265

④栗林均、「近代モンゴル語辞典の成立過程－清文鑑から『蒙漢字典』へ」、『東北アジア研究』第16号、査読有、2012年、127-147

⑤渡部洋・松川節・小野浩・古松崇志・石野一晴・毛利英介・伴真一朗・清水奈都紀「漢文・モンゴル文対訳「達魯花赤竹君之碑」（1338 年）訳註稿」『真宗総合研究所紀要』29巻、査読無、2012年、107-238

⑥松川節、「ブレーニィ・オボー契丹大字碑文（モンゴル国）の発現」『遼金西夏史研究会 News Letter』4号、査読無、2012年、40-43

⑦栗林均、斯欽巴図、「「トド文字一百条」と『三合語録』のモンゴル語の対応」、東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第14号、査読有、2010年、189-225頁。

〔学会発表〕（計５件）

①松川節、国清寺八思巴字蒙文聖旨碑、内蒙古大学蒙古学学院学術講座、2013年12月27日、中国呼和浩特市

②栗林均、伝統的モンゴル文字の電子化利用の現状と課題、情報処理学会デジタルドキュメント研究会、2013年7月25日、盛岡市

③松川節、清代のチベット語・モンゴル語辞典について、国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」、2011年2月12日、仙台市。

④栗林均、清文鑑から『蒙文総彙』へ－近代モンゴル語辞典の成立過程－、国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」、2011年2月12日、仙台市。

⑤Saitô Yoshio,Terminative Case in Mongolian, Permanent International Altaistic Conference(The 53rd Annual Meeting), 2010.7.28, St. Petersburg, Russia.

〔図書〕（計　８件）

①栗林均、斯欽巴図、東北大学東北アジア研究センター、『蒙文倒綱－モンゴル語ローマ字転写配列』、2014、1-603ページ

②栗林均、東北大学東北アジア研究センター、『孝経－モンゴル語古訳本－』、2014、1-186ページ

③栗林均、東北大学東北アジア研究センター、『「土族語詞彙」蒙古文語索引』、2013、1-183ページ

④栗林均、東北大学東北アジア研究センター、『「保安語詞彙」蒙古文語索引』、2012、1-148ページ

⑤栗林均、東北大学東北アジア研究センター、『蒙文倒綱－資料編・原本影印－』、2012、1-148ページ

⑥栗林均、東北大学東北アジア研究センター、『「元朝秘史」傍訳漢語索引』、2012、1-582ページ

⑦栗林均、東北大学東北アジア研究センター、『「達斡爾語詞彙」蒙古文語索引　附：満洲文語索引』、2011、1-300ページ

⑧栗林均、東北大学東北アジア研究センター、『蒙文総彙－モンゴル語ローマ字転写配列』、2010、1-592ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
栗林　均（KURIBAYASHI, Hitoshi）
東北大学・東北アジア研究センター・教授
研究者番号：30153381

(2)研究分担者
斎藤　純男（SAITO, Yoshio）
東京学芸大学・留学生センター・教授
研究者番号： 10225740

松川　節（MATSUKAWA, Takashi）
大谷大学・文学部・教授
研究者番号： 60321064

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
橋本　勝（HASHIMOTO, Masaru）
大阪外国語大学名誉・教授

フグジルト（呼格吉勒図）
内蒙古大学・教授

ナスンオルト（那順烏日図）
内蒙古大学・教授

トモルバガナ（特木爾巴根）
内蒙古師範大学・教授

ガルディ（嘎日迪）
内蒙古師範大学・教授

エルデネ・プレブジャブ
モンゴル科学アカデミー研究員